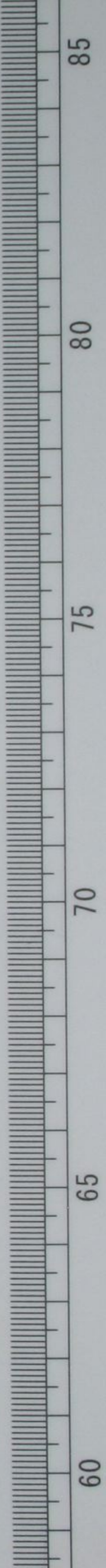


波いゝる七車

下



門へ 5
親
者



七車 卷一五

序 跋 歌

さうさうと来序

汎濤の大さはいちぢうもいづれ句のかこ
ちけうなぬもいづれも只ま平生れれ
ゆる天原はおんで雪月花の誅ねるよ
戯れ神女をまゝ月よみえぬる乃
浮橋をさうぐいし踏ふる地平に
きんろの花はさうさうと水に位



え保十一戊子年仲冬日

亥子年序

いんー説書を古ーやとれど十は
づさすくを新ーとてお終るもか
らぬとて(さ)に(さ)に(さ)に(さ)に
しむに(さ)に(さ)に(さ)に(さ)に
さ(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
九(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
い(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の

まぬ。像を下に(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
けの(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
え(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
序(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
え(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の

何れか序

細く(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
時(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の
を(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の(さ)の

なぐさきも敷ふはちうぬされど月の隈
なさらぬもくば花のふゆやふらふと
うぶつけ言うばらばうれはうぢあな
んうぢするふよふぬものなうーうれい
うと何乃もつてぞやうううはちの
うなまうてさうう永さ七さぬのと
ーまむつこの月のも遠連る中乃お
よふて 鬼きうめ

老ね森見序 百九

泥濘ハ天のうもあれ命の老戸の戯より
中江古々まねもろのききうらまき
れいゝのききいなる九をうけうさむ
ふ鏡まきうてを吸ーふふらにあり
を圃ありまねありる九やうのねにま
雲をかきうてなるふをうてし月ちよ
まきまきうてはさうは秋る事ー久し今
うていふては句をうらうていふ
あふみづう海を付てううけーせうて

つゞも一巻の巻字なるといふ事あるも
補ふて終るなり。なほまた九いさゝか
其のよれも若なるべし。ちよみなる
どんちと其おまのしりしりて
五段を接する事。そ流中の仙
んやう

享保えひのちね 極月中旬

誹諧童子教序

順水丈人撰 誹諧童子教

請予序因賦一章

安然童子教

順水童子教

其説良有

善哉童子教

わくを皮ハ味ないそふ素爪

大語物狂序 并發句跋

予丙寅季夏如赴東武辞友人等勸

予其送且謂曰吾く以欲見を惟

富士山耳雖數聞諸は来々言大

而己景象靡詳請子記来及於我乎

月歸_レ于難波_ニ遂_ニ至其塚_ニ上_ニ愴然_ニ而嘆_ス
曰難_カ矣生也_ニ將_ニ与_ニ誰_カ語_シ之_ヲ但雖_レ其人
無_ク之猶_レ在耳_ニ豈_ニ欺_ニ於死_ニ哉_ニ滌_ニ翰_ニ
荻露_ニ效_ニ於鑿_ニ劍_ニ云

囉々哩居士鬼貫

富士_ニ於_ニ此_ニ畫_ニる_ニい_ニき_ニか_ニる_ニ事_ニなり
とれども_ニ腰_ニに_ニ帯_ニき_ニて_ニれ_ニる_ニよし_ニを
か_ニる_ニその_ニ布_ニに_ニた_ニま_ニて_ニれ_ニる_ニよし_ニを
して_ニ我_ニなる_ニ不_ニ二_ニを_ニみ_ニる_ニ事_ニに_ニお_ニぬ_ニ可_ニ

い_ニは_ニる_ニや_ニあ_ニら_ニる_ニお_ニの_ニ徳_ニ
こ_ニた_ニる_ニな_ニむ_ニい_ニゆ_ニる_ニあ_ニれ_ニ固_ニと_ニ名_ニ
め_ニる_ニい_ニま_ニる_ニ古_ニ々_ニ果_ニる_ニの_ニい_ニる_ニぬ_ニ
う_ニあ_ニれ

い_ニは_ニる_ニと_ニ杖_ニの_ニを_ニなる_ニ不_ニあ_ニる_ニい_ニ

タ_ニれ_ニる_ニだ

い_ニは_ニる_ニと_ニ杖_ニの_ニを_ニなる_ニ不_ニあ_ニる_ニい_ニ
事_ニハ_ニハ_ニあ_ニる_ニも_ニい_ニる_ニ不_ニあ_ニる_ニ滅_ニの_ニを_ニ戦_ニ
頂_ニに_ニぬ_ニる_ニの_ニわ_ニる_ニも_ニあ_ニる_ニ事_ニに_ニあ_ニる_ニ

金

馬韻

根ハ常盤志付
紅紫ぬねのつ

是也

下略

二

△
△
△

1

1842

卷二

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

伊丹の愛句合とて、地を月尋ふ懐よ
出づ。予は後をもとむるも、かゝる里の如し
等力句を對して、独りつゝの句をさかひ
せしむ

なる。其の安んぬれども。一様なり。
 ども。性のほろも。むのづうれぬ。
 とも。ふり。なり。才。磨。つ。は。希。
 も。花。を。粧。ひ。毎。日。う。づ。有。の。心。
 求。む。は。は。梅。乃。お。め。は。い。
 き。え。ど。柿。園。の。お。れ。き。だ。は。か。ど。
 て。実。を。つ。れ。温。う。ぬ。も。れ。う。れ。は。有。
 なる。

正徳甲午年

正德甲午年

郭乙女史の跋

117

支考何ふれの事と成て西よりな
神うれをわの勾ひ成をむそをあら
て。序にまきうらふよるめのもくろ
よせぬ

ふまゝと夏の城乃唱まぬ

夏永二、雨の夏日流の永昌陽

鬼母む

哀小田政舎孫撰

あふ田といふ成はつて、うれをの種を口

うそふあうまはつて。  是とらふの
ふせ 佛え

うねと船と船とつる野のあ

古国流格波

泉字無く、仲友のは、うめを太
ふし、頭を流格と似、そを訪るの事
うねと船とつる古国流格、そを指さ
て初め、うめをたうて去

うねと船とつる初め、 大居士 鬼母

贈辭記讀類

南於和井和泉におる日

星に望みの教をうけしはくは侍りあ
はる里のふは人の心を通しあはれ
てまをうくの日の花は中そとに
あはれ。何づか和井氏の功をまに
おにを感し。おれおれおれおれ
くをきき歌さる。まに。おれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ

まに。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ

閑立和泉におる日

おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ
おれ。おれおれおれおれおれおれ

まづゆのやれをききさく きたるは

大日理をうきまき 月のおくはく
おのろふをうきまき 月のおくはく
なんの秋をうきまき 月のおくはく
おの格式人をうきまき 月のおくはく

大日氏何う。よく強ははくさめて伸

尾のほろく。いふはくさめて伸

万幸おのつ。いふはくさめて伸

おの月のおく。いふはくさめて伸

事。いふはくさめて伸

お中は所の術使が。いふはくさめて伸

あつた。いふはくさめて伸

おは。いふはくさめて伸

はの。いふはくさめて伸

いふはくさめて伸

ま。いふはくさめて伸

まの。いふはくさめて伸

一。いふはくさめて伸

あ。いふはくさめて伸

いふはくさめて伸

事をほろぶぞを授けしよ

是くは蛇のふくこその甲

次の川は在るふつたもいづこ西國にたふさ

流るれ

玉川をちいせふれい四月廿

とてふ百部といふてふて川は卯のち

の御うたふれく調布いともいふて

白を帯きり

川は卯のちの日はる田のち

情はすもふれたをいふていかなはきんめ
いふていふ

あゝあゝあゝ白もたれくちのち

いつれをちて月をいふ

夕ね枯草のちをてなごめちのち

とくはちをていふていふていふ

ん院にそ国の境界をいふ

いふていふ碓氷のちをいふ

わきれていふやちんともいふていふ

捨てあすを

吹ぬや 穉の青匂ふ 貝も 榎

右より武庫後海のつぎまき後海へた

ハ伊勢うゝこの岸はうねる一木

見る人とならぬおぼむくもたうら

ちりて風景とくくあきやうなり

いそなうき後海のたうに海もくれ

しうり堂のめの新地家立なりびおきり

堀江の川みだに西海の浪をわきれなりを

きむ帰帆まゝ屋上より安きぬ
旅人の目うねをわきぬにば夕はけり
うね

次鹿の秋れねせんききる 帆きり

こり飄海にわづれより句のね

出てアハおねいひ 秋のね 由平

月も持つうらものねれぬ 鬼形

法句略し

五り十万をうらめれてあけ

そまれ

秋風や男世帯に鳴るる

月乃あふりゝおきぐる候

たふれそはる時

七日夢水にゆはき立出てほろの夢屋

おふ

秋の風吹わろく人の顔

おれあふ時

向き候

うゝあゝと涙を休て牛るの息まで
も静なりぬれをのれあは本海なれ
ど綿のれきゝるゝもの時きう顔ゝと
ハのひとやさ

機走ぬを細ゝきうや栗袋

は名月

うゝと指のねねもくぬえとぬえとあふ
れきききききききききききききき
れきききききききききききききき
れきききききききききききききき

全

鬼交脇文十第三

小條圓水つやより馬毛と云ふ髪をうへ

道に性ある人ハ志を成す事能ふ
 性なき者ハ志を成す事能ふ
 志なき者ハ志を成す事能ふ

一、華人の説法は、よく述べてみづから
をよろこぶ。む彼等教の人へ、よく
述べるが、よく言ふと、悦び、悪し
くとくを、む是に、よくくれはなう。
そら、その事、成るべく、よく人を知る。
ある人は、それを、あつた、いふ、おれ
ハ、まゝ、と思ふ、れ、いふ、多し、それ変化
を、よく人よ、先き、よく、盲者、よく、よく、
む、よく、バ、劉強のもの、よく、立て、よく、弱乃

え祿ハ亥のましれむ月かんらむねね母
 乃夢恵よ南面をねるうとうとう向を
 見てその年の亥の月此中乃亥忠は卯
 卯上刻の誕生をも名をふち申と唱ん
 て月をさう日銭きんに走つていふ總明
 人よえん平せもてあそぶやどハ武能の
 然ハゆりける淨勢なりしをいふ神
 弓の上ねる日よう。病癒のきえんはねさ
 き。醫療應ぜどく。中の五られ成の

ト刻ハ終るぬ抑うねぬすのあつて
 や。南面のねゆえなうに於西東のねハ
 ねやう。なふん大枝をねぬはあそ
 ね新表をあけしあふい。いふは天敷
 乃りぬづん。はつされどを念ふぞう
 ともち龍がうて老うるまの明理き
 日地は早う人。おのむ。いふをうづ
 一胸を叩き。松吹風ハいふや音よ
 あそぶ。あそび。一ちの夕。夜をねる

きうりて

たは切てその笑あもあき事ニ
口ハ西より入る。明に東より出る。梅
の花に。よみ又花はまき。一切を。宣年乃
夏。明り永き。即。その利。得。事。も

あきをわう。て。ん。れ。ハ。中。より。た。も。た。し
さ。れ。も。あ。う。ち。た。も。た。も。た。あ。う。

え縁十三歳

父佛足

子西寺廿一

境金何り。死を待て。野。の。中。

花のあいた。内。の。ゆ。づ。な。も。う。く。の。意。

よ。い。む。而。新。も。い。け。う。も。ま。の。花。も。

ま。の。何。う。て。その。中。の。事。も。ま。の。事。

は。う。う。つ。ん。う。う。れ。い。れ。

ら。あ。ま。さ。れ。ど。西。や。乃。出。る。

る丸出

西。り。ハ。花。の。下。より。あ。る。人。も。ま。の。事。

ら。あ。ま。さ。れ。ど。中。乃。西。の。事。も。ま。の。事。

ゆくねの境をさへさへ月夜の迄を
わき戸へいけい妄想能断して無念
心の佛性をも見ゆるさるるなり
縁なき事の橋月より人の数なり
ぬるるそのくちなる朝あをさるる
なりぬる一枝をさるるなり

なま乃秋の程の甘きなり

鬼女

はなふ旦七回忌をいふなり

瓢箪の饅いんぞいけりなり
いそむるも水は流てちんくぬい
てぬ

ひやけや七つなりなり佛

字旦末初よその中いそぎ瓢箪の大饅いん
くそりけていそぎなりなりなりなり

池西より一圃忌なるなりなり

より方後なりなりなりなり

初きなりなり

そえばなりなりなりなり

件をえりし古人の意を勸せしは、
池西之水、流落は業ありて、その中、
副ふあふぬ人の教へて、維舟の流を
汲み、ちてをみせしは、
乃こそまじくして、依りて、
もと、
七十の年のほ、
て、
まゐる人、
きあへ、

きあへ、
て、
ゆゑ、
さゝ、
せん、

朽とせぬ、

あま、

あま、
友よ、

[illegible]

ふやあのをれぬれふい念ふしとて
 井やとてにねえとてふとてとて

あとのとくに同下は、あとのを

事出有因

花ももろれぬまゝに——きんちうしめぬ
 ような。さうするのよ。に。第十とせぬと
 うへ。お神のさきううとて。——たぐひの
 足もたぐひぬ

又乃如左

鬼貫一名佛兄、姓ハ平泉、假名、力之共、本はの
國伊丹の人、其先ハ、もれなる、和泉之郎忠、
より、出る、表して、權花前といひ、又囉々、嘿、ある
ハ、犬居士馬樂堂など稱せり、中は、洛の堀川
に寓し、後ハ、信濃、又住む、壮年の法、
郡ハ、本多、度、
乃、
七十、
號、元文三年、戊午秋、
内

うけに谷やう乃家より病没せりとも今世
流落を事とてふ人鬼界を去るあり、
ありぬとも一掃く搜りぬるを稀く、これ
すく、當時はきぬいり、伊丹の一家家は
て点者てみ稱を立とば、これ支考野坡
なりとも、自ら銜ありとも類ありとも、
一、あるや、その小傳を因とて、心を
ほろ、浪速は暫く洛にも居を寓せ、導引
を以て年月をさるるのよし、その其例に

るや、その明人某國の乱を以て後浦より
投てを道古なるもの、親に隨ひ、蹟を探りて、
其技をけけ、ゆ、ぬ、翁、即古の高第より、
籃より物の故あり、天性真率不羈り、
うろづ物に拘る事あり、すき、て、識を、
曾て弱き、一、時重頼と、学ひ、宗回を友と
し、い、に三十年より、及て、卓然として、一、
城なり、同々の百九十九人を推し、一、伊丹
風なり、を興す、其調天は、併地を、拔、併、

用て俗を離れ、初ハ入るゝめくうして、
人々を除難し、生涯の佳什人のさうめ
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
解しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
えゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
芭蕉より十七七年もやあつたゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古の功ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
視せられゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
臥しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三宅嘯山題



全二冊

集陽をさるる人け中と足れ集陽を
師匠方としても代わて教をなれ集
繪圖を八其月毎の道具の名をその
如く若要害方事の方の奥儀を
悉く記し秘受の所方とせし卑く
合点の所なりし集陽の事と事集
和漢袖玉年代記 全

本內小聖德 全六冊

全六冊

全五冊

澁り多き、諸人は、是より、今、
 け書、我、度、も、く、
 て、よ、ん、
 兼、学、定、後、法、
 世、ふ、
 の、
 二、
 と、
 て、
 日、
 日、
 二、
 二、
 二、
 其、
 其、

出来

嗣出

嗣出

五冊

二冊

二冊

一冊

一冊

丑五月

心齋橋筋南久宝寺町

大坂書林

高橋半助梓

